ベルンについたレーニン

倉田　稔

目　次

はじめに
1．「戦争に関するテーゼ」
2．「ヨーロッパ戦争における革命的社会民主主義派の任務」
3．「戦争とロシア社会民主党」
むすび

はじめに

本稿は，第1次世界戦争中にレーニン（Владимир Ильич Ульянов, 1870～1924）が亡命していた時代のうち，ベルンで活躍した頃，それも初期，1914年をとりあげる。なぜなら，帝国主義戦争に反対する彼の戦術がこの時期にでき上ったからである。

1．「戦争に関するテーゼ」

第一次世界戦争[1]が勃発し（1914年7月28日），その後，ロシアがオーストリア・ハプスブルク帝国の敵国になった。それにもかかわらず，レーニンはオーストリア帝国のポロニン（ガリチエンの一農村――現在の南ポーランド）で愚図ぐずしていた。そのため，彼はスパイ容疑で逮捕される始末であった。運が悪ければ，軍法会議で銃殺刑に処されかねなかったのである。こうして，散ざんな目に会い，一ケ月も無駄な時を費やしてしまったレーニン一家は，ほうほう

1）戦争については，さしあたり，ハート『第一次世界大戦』フジ出版。テイラー『第一次世界大戦』新評論　1984年，を見よ。

の体で，中立国スイスへ逃れ込んだ。この一ケ月のオーストリア時代に，彼は，殆んど作品を書けなかった。しかし，帝国主義戦争と革命にかんする基本的戦術はほぼ作りあげていた，と確実に言える[2]。

レーニンと彼の妻ナヂェジダ・コンスタンチノヴナ・クループスカヤ，そして彼女の母エリザベータ・ワシリエヴナを乗せた汽車[3]は，1914年9月5日（以下，すべて西暦で表示する）の夜，ベルン鉄道駅にすべり込んだ。在ベルンのボルシェヴィキ党員シクロフスキー[4]が，すでに連絡を受けていたので，駅に出迎えに来ていた。レーニンは，国境駅ブフス（Buchs）で止められたエピソードを彼に語った。しかし，それをめぐってお喋りをしたり，想い出をこもごも交し合うことはしなかった[5]。彼は，シクロフスキーに，明日，会議を開くからベルンに住むボルシェヴィキ亡命者を招集してくれるよう，頼んだ。この会議こそ，亡命中のレーニンの反戦活動の第一歩になったものであった。いわば，彼の活動は，ベルン駅のプラット・ホームを踏んだその時から始まった。

ベルン駅からシフロフスキーのアパートへ向う途中，シフロフスキーはベルンのボルシェヴィキ党員の状況について語り，一方レーニンは彼に，ドイツが戦争に勝つだろうし，戦争は世界革命のてこになると述べた。勿論，初めの言は，レーニンの見込み違いにおわる。レーニン一家は，伝記によると，この晩だけシフロフスキーの家（ファルケンヴェーク Falkenweg 9）つまりアパー

2）注23）参照。
Ленин. Полное Собрание Сочинений, изд. 5,　［以下，Л. と略す］ том 25, Москва 1969に，この時期に書かれたものとして「戦争と革命のプラン」があげられている（стр. 450～451，訳『レーニン全集』大月書店［以下，『全集』と略す］，第41巻，1967年）。しかしこれ以外に，後述の「戦争にかんするテーゼ」あるいはその草稿を，この時期につくるのである。

3）Willi Gautsch, *Lenin als Emigrant in der Schweiz*, Zürich Köln 1973, S. 311（Anm.）

4）ゲオルギー・リヴォーヴィッチ・シクロフスキー（1875—1937）。1898年以来のロシア社会民主労働党員。1903年からスイスに亡命。化学者。戦争中は，レーニンのもとで，技術・会計係などを担当。

5）Maurice Pianzola, *Lenin in der Schweiz*. Berlin 1956, S. 70.

トに泊ったことになっている。しかし実際は，自分たちのアパートを見付けるまで数日間[6] 滞在したのである。

レーニンがスイスにやって来るというニュースは，在スイス・ボルシェヴィキを大いに喜ばせた。翌日，9月6日の朝，ベルンにいたボルシェヴィキ全員が集って，会議を開いた。会合は，もしもの時の用心に[7]，といっても実はその必要はなかったのであるが，ベルン郊外の森，グローサー・ブレームガルテンヴァルトで開かれたとされる。これが有名な<ベルンの森の会議>である。この森はベルン市の西側に接した広大な森林である。しかし，ドイツ語版レーニン著作集初版によると，会議はシクロフスキーの住居で行われた[8]，とある。グループスカヤの『レーニンの想い出』[9]，また出席したサモイロフによれば[10]，森で会合が開かれた，と述べられており，結局どちらかはっきりしない。しかし，用心のためであれば，郊外とはいえ，人に会わないとも限らないし，しかも後述するように少なくとも8名はいた会議である。同志の家が一番安全である。詳しい研究をしたガウチはこう書いている。その時のベルンの9月初旬は，穏やかな晴れた晩夏の天候であって，郊外へ出掛け，近くにあるブレームガルテンヴァルトへ気晴らしに散歩し，その際，議論を続けたということは，極く自然である，と。要するに，会議は，シクロフスキーのアパートで，6日から8日まで開かれた。そして時折，森へ散歩がてら行き，討議もした，という可能性が大きい[11]。

森には彼らの住居から，ものの10分もあれば達するし，会議には余り向いていない。またスイスであるから，当時，弾圧を考えるのは余計な心配であった。

---

6) Gautsch, *op. cit.*, S. 98.
7) G. Walter, *Lenin.* Paris 1950, p. 232. ヴァルテル『レーニン伝』角川文庫，247 ページ。
8) *W. I. Lenin. Sämtliche Werke,* Bd. 18, Wien Berlin, S. 587. もっとも，この文献では，ジノヴィエフもそこに出席した，とあるが，誤りである。彼は，まだベルンに到着していない。
9) **Крупская,** ***Воспоминания о Ленин.*** **Москва 1968, стр.** 243 訳，グループスカヤ『レーニンの思い出』下，青木文庫 1978，158ページ。
10) *Lenin-Dokumente seines Lebens.* Bd. 1, Leipzing 1980, S. 561.
11) Gautsch, *op. cit.*, S. 104.

この会議への参加者は少なかった。おそらく８名である。一説によれば12名くらい（１ダース）である[12]が，名前は８名しか未だ分っていない。具体的には，レーニン夫妻，シクロフスキー，サファロフ夫妻[13]，ゴベルマン[14]サモイフ[15]，（国会議員），それにマチョーフ[16]という無名の人物であった。

以上が，この有名な会議に関する詳しい説明であるが，場所と人数については矢張り釈然としない所がある。そこで，一番の中心人物，シクロフスキーの記述に注目するべきである。彼は書いている。「まさにその会議は森の中で行なわれた。」「別の日，即ち九月六〜七日に，私の部屋でもっと少ない人数の会議を行なった。」ここから，矛盾が解決する。つまり二種類の会議があったのである。一般党員も含む森の会議が行なわれ，そして，レーニンに近い人の会議がシクロフスキーの家の彼の部屋でも行なわれたのである。こうして，別々の想い出の記述が出たのだし，参加人数もばらばらではっきりしなかったのである。少ない人数の会議について，シクロフスキーは言っている。その会議には，「イリイチ，ジノヴィエフ，ナジェジダ・コンスタンチノヴナ，のほか，同志サモイロフ，サハロフ，リーリナ，そしてひょっとすると同志イネッサも出席していた。」[17]この記述になると，もう記録は不正確になっている。ジノヴィエフ[18]はまだスイスに来ていないのである。だから妻リーリナもいない[19]。

12）Walter, *op. cit.*

13）ゲオルギー・イヴァノヴィッチ・サファロフ（1891—1942）。1908年以来の社会民主党員。1912年からスイスに亡命。

14）M. L. ゴベルマン（1891生）。ボルシェヴィキ党員，ローザンヌにいた。

15）フョードル・ニキティチ・サモイロフ（1882—1952）。繊維労働者出身。第４国会のボルシェヴィキ代議士６人のうちの１人。1914年春から，神経衰弱のためベルンで治療を受けていた。11月に帰国し，他のボルシェヴィキ議員とともに逮捕され，シベリアに流刑。10月革命で，ウクライナ労働人民委員となる。

16）Gautsch, *op. cit.*, S. 104.

17）**Г. Л. Шкловский, Владимир Ильич накануне Бернской конференции. В: *Пролетарская Революция*, 5 (40) май, Москва Ленинград 1925, стр. 137.**

18）グリゴリー・ジノヴィエフ（1883—1936），18才で入党。1903年以来のボルシェヴィキ。1907年，中央委員。

19）レーニンがベルンに着いてから約２週間後，ジノヴィエフ一家がガリチアからやって来て，レーニンの家の近くに住んだ。ジノヴィエフはこれ以降，戦時中，「レー

レーニンは，この会議で，ボルシェヴィキ党の戦争に対する態度について報告した。この時彼は，自分の思想を書き付けた紙片を持っており，それを見ながら報告[20]した。

この手稿は，「戦争にかんするテーゼ」[21]か，あるいはそれの草稿（＝下書き）か，のどちらかである。この「戦争にかんするテーゼ」は，『全集』によれば，9月5日から6日に書かれたとされている。そうすると，レーニンがベルンに到着した日から会議の第1日目の間に書いたことになる。彼は大変周到な人であって演説の前には草稿を作っておく習慣であった。またそれをグループスカヤに読んで聞かせるのである[22]。演説ではなくて会議なので，簡単に済ませたのだろうか。シクロフスキーの家に泊めて貰いながらそして朝から始まる会議を準備する間に，印刷にしてたっぷり三ページの文書を書いたのか。それとも，机の埃をはたきで払って整頓してからペンを執るきちょうめんなレーニンが，走る汽車の中で書いたのか。シクロフスキーは記している。「帝国主義争におけるレーニン戦術の基本的スローガンがオーストリアにおいて戦争の初めの時期に，彼によって作成されたことを私は明らかにすることができる。というのは，レーニンは既に出来上がったスローガンをベルンへ持込んでいたからである。」[23]ここからおそらくレーニンが既に，無駄な一ケ月を過していた

ニンの副官」として活動する。この時レーニンの心の恋人イネッサ・アルマンド（簡単な伝記として，ポドリャシューク『革命家として母として』大月書店 1971年）は，スイスのレ・ザヴァンにおり，やがてベルンに来て，シクロフスキーの家族とともに，この4つの家族が戦時中仲良く暮すのである。アルマンドがこの会議に出ていた可能性は少ない。

20）「手にした小さな紙片を見ながら，レーニンは戦争の性格について，戦争にたいする国際主義者の態度について，意見をのべた。」（ノーボスチ通信社編『レーニン亡命記＜下＞』刀江書院 1970年，206 ページ）

21）**Тезисы о Войне. В: Ленинский Сборник, 14, Москва Ленинград 1930, стр.** 10—12。ロシア語全集第4版に入っていて，第5版に入っていない。『全集』第36巻，1965年，321—324ページ。

22）Cf. Nikolay Valentinov, *Encounters with Lenin.* London 1968; 訳『知られざるレーニン』風媒社 1972年。

23）**Шкловский, стр.** 136.

と言われるオーストリア時代にこの文書或いはこれに類似した文書を作っていたのではないかと思われる。

レーニンは，これに基いて報告し，自分の結論を同志たちが納得したかどうかを確かめた。おそらく妻クループスカヤおよびシクロフスキーを除けば，この会議で始めて口頭で彼の基本見解が公表されたのである。レーニンが報告した時の紙片が「戦争にかんするテーゼ」なのかどうか，紙片に書かれた文案を討論を通じて変更したのかどうかは分らない。しかし彼の演説は，ほぼ「戦争にかんするテーゼ」の内容を詳しく述べたものと見なして差しつかえなかろう。

ここで，「戦争にかんするテーゼ」の内容を概括しておこう。それは，7項目からなっている。

(1)　今おこなわている戦争の意義・内容は，市場の争奪と他国の強奪，国内の革命運動の阻止，プロレタリアを分裂させ粉砕し，ブルジョアジーのために他国の賃金奴隷にその国の賃金奴隷をけしかけることである。

(2)　ドイツ社会民主党の指導者たちは，社会主義を真向うから裏切っている。

(3)　ベルギーとフランスの社会民主党指導者も同じく非難に価する。

(4)　第2インターナショナルは，思想的・政治的に崩壊した。だから本来のインターナショナルの任務は，これと決定的に離脱することである。

(5)　ドイツ・フランスのブルジョア政党や政府は，ブルジョア的，排外主義的詭弁を使っているし，社会主義的日和見主義者もそうである。ともに，戦争の残虐行為と野蛮な行動の点で変りがない。

(6)　ロシア社会民主党の任務は，排外主義と容赦なく無条件に闘うことである。ツァーリ君主制とその軍隊の敗北する方が，害が少ない。

(7)　かくして社会民主党のスローガンが挙げられる。1．社会主義革命と，政府に武器を向ける，宣伝。愛国主義と闘うこと。2．共和制的ヨーロッパ合衆国への転化。

以上の様であった。参会者は身動きもせずに[24]，レーニンの話を聞いた。シ

24）これはレトリック。

クロフスキー[25]だけ異議を唱え，彼は言った。「ドイツの勝利は，ロシアの帝政よりもヨーロッパの民主主義には危険な敵であり，革命闘争を強化するためにロシアを苦境に追い込むことは，国際的な労働運動の全体に害毒をもたらすものであろう。」

レーニンはすぐに相手を黙らせた，という。しかしこの異議は，当時の社会主義者にとって当然の意見であった。レーニンの主張は，戦争国すべてとその政府，および戦争を支持するあらゆる政党を，ことごとく非難することであったが，この時出された異議は控え目なものであったし，ドイツが世界で最も危険だという認識は，多くの人が抱いている見解であった。プノハーノフもこの時期にはそのように考えるのであり，ボルシェヴィキの内部からかかる意見が出たのは当然でもあった。レーニン的路線は初めから皆に共有のものではありえなかった。それになにしろこの意見＝方針は，ここで初めて出されたものだからであり，レーニンの独創でもあった。

尤もこれについては後日談があり，シクロフスキー自身がこう書いている。「イリイチが森の中で自分の報告を行なった時，私は皆を揺さぶり，論議をたきつける為に，ショーヴィニズムの擁護を行なった。そのとき，私にとって問題は既に全く明らかだったのだが。」[26]我々のグループには誰もそのような人はいなかった。そしてこっぴどく非難された，と。

会議は，この「戦争にかんするテーゼ」を採択した。この文書の意義を述べておこう。ほぼ全体をつうじて，第2インターナショナルの諸政党に対する仮借ない非難に貫ぬかれている。

第(1)項にある，帝国主義戦争の経済的基礎が，後に『帝国主義論』で研究されることになる。そして，この項では，「この戦争は，ブルジョア的，帝国主義的，王朝的戦争というはっきりした性格をもっている」と規定された。これは，第1次世界戦争を適確に性格づけたものである。しかし，後にレーニンは，この「ブルジョア的，王朝的」という形容詞を，『帝国主義論』で取り去るの

25) Walter, p. 233. 日本語訳にはこの名は出ない。底本を示していないが，異った版を使ったのであろう。

である。

第(4)項に，「ドイツ社会民主党やその他の国の社会民主党の，いわゆる『中央派』[27]は，実際には臆病にも日和見主義者に降伏した。」という指弾があり，次いで，第(5)項にも，「…社会主義的日和見主義者は，公然たるものも，かくれたものも，こういう［＝排外主義的］詭弁をくりかえしている」という指摘がある。この「かくれたもの」とは，「中央派」に他ならないが，レーニンは，後にこの派に主要打撃を与えるようになる。

第(6)項で，レーニンのいわゆる「敗北主義」が述べられる。これこそレーニンの，そして彼だけの特徴であり，ロシア国内のボルシェヴィキに混乱を引き起こすことになる主張である。また，前出のシクロフスキーの異論もこの点に関わっていた。引用すると，「ロシアのすべての民族の労働者階級と勤労大衆の見地から見れば，ポーランド，ウクライナおよびロシアの数多くの民族を抑圧しているツァーリ君主制とその軍隊，他の民族にたいする大ロシア人の抑圧を強化し，ツァーリ君主制の反動的で野蛮な政府を強固するために民族的敵意をたきつけているツァーリ君主制とその軍隊の敗北するほうが，害がもっともすくないであろう。」

この，自国政府の軍事的敗北に関する説は，理論的・一般的には正しいものである。つまり，戦争に勝利した国では革命は起こりにくいし，反対に，戦争に敗北した国では革命が起こりやすいからである。ただし，レーニンがそういいう意味で言っているかどうかは，不明である。

第(7)項に，共和制的ヨーロッパ合衆国のスローガンが掲げられている。これは，我々が『帝国主義論』形成史を研究するにあたって，極めて重要な論点の1つである。というのは，後にこれが否定されることになるからである。こうある：「ヨーロッパの個々のすべての国家を共和制的ヨーロッパ合衆国へ転化すること…」。ここで彼が国際革命＝世界革命，正確に言えばヨーロッパ革命

26）Шкловский, стр. 137.

27）ドイツ社会民主党内に1910年頃から発生した「マルクス主義的中央派」。労働運動内に革命的急進派が発生し，それ以外の旧左派を言う。右派との中間に位置し，理論的代表は，K・カウツキー。これは，ドイツだけでなく国際的に発生する。

を考えていることがわかる。

最後に1点興味あるものは，この「戦争にかんするテーゼ」中に，彼の戦時中の基本的戦術である，帝国主義戦争を内乱に転化せよ，というスローガンがまだ挙げられていない事である。尤も，政府に武器を向ける宣伝というスローガンがあるので，事実上あると言うこともできるが，表現としてはまだない。

さてレーニンはベルンに来てみたものの，この時，ベルンに住むかジュネーヴに住むかということをまだはっきり決めていなかった。彼は，かつてスイスに亡命したことがあり，読書協会 Société de Lecture でよく勉強ができたり，立派なロシア図書館があった旧知の土地ジュネーヴに心を引かれていた。ベルン会議の日，9月6日に，彼は，在ジュネーヴの党員カルピンスキー[28]に手紙で尋ねている。ジュネーヴで，物価とくに家賃は異常に値上っていないか？台所が利用できて月払い家賃で，家具付の2部屋が借りられるか？　読書協会は変ったか？　ジュネーヴにロシア語の印刷所があるか？　リーフレットなどを出版できるか？　と[29]。しかしベルンの友人たちは，ジュネーヴがすっかり変ってしまい，そこにはパリやブリュッセルや他の都市から，あらゆる傾向の沢山の亡命者や，兵役拒否者が落ち合っており，そこのロシア人居住地区では信じられないような亡命者のごたごたで一杯である，と言った。そこでレーニンは，ジュネーヴよりも仕事のよく出来そうな静かなベルンの方を選んだ。レーニン一家は，問題を最終的に決めないまま，さしあたりベルンで部屋を借りた。ドンネルビュールヴェーク Donnerbühlweg 11 a（現在の33）のアパートであった。

「戦争にかんするテーゼ」は，9月中旬，サモイロフとボルシェヴィキのシンパ学生が，非合法にロシアに持ち込んだ。それは，ペトログラードにある党中央委員会のロシア国内委員会および国会議員団に渡った。テーゼは，ロシア最大の党組織，ペトログラード，モスクワ，ハリコフ，キエフその他の党組織

28）カルピンスキー（1880—1965）．1898年以来の社会民主党員。1904年以来ジュネーブに亡命。戦争中は，レーニンの下で出版・技術活動に従事する。

29）*Л.* том 49, стр. 3 Москва 1970,『全集』36巻，325ページ。

で審議された。「これらの党組織はみな，いくらかの訂正を加えただけで，テーゼに賛成した。」[30]と，党史では書いている。

トロツキーは反対にこう言う。党のテーゼの受取り方は，一般に承認の態度から程遠かった。主な反対は，レーニンの「敗北主義」スローガンへの反対であった。シリャプニコフ[31]によると，それが「混乱」を引き起こした。戦時，カーメネフ[32]に指導されていた国会議員団は，レーニンの定式の鋭い刃を鈍らせようとした。モスクワと地方の党組織でも，同じような事が起った。モスクワのオフラーナ［＝ツァーリの秘密警察］は，こう証言している。「戦争は『レーニン一派をまどわ』せ，長いあいだ…彼らは戦争に対する態度について一致をみることができなかった…。」モスクワのボルシェヴィキは，ストックホルム経由でレーニンにあててつぎのような暗号文を送った。「彼［＝レーニン］に対するあらゆる尊敬にもかかわらず，家を売る［＝敗北主義のスローガンをかかげる］ようにという彼の勧告は，同意が得られなかった。」サラトフでは，地方指導者アントノフによると，「ボルシェヴィキ，メンシェヴィキ，エス・エル［＝社会革命党］各傾向の労働者は，敗北主義の立場に同意しなかった。それどころか…彼らは（わずかの例外をのぞいて）断固とした祖国擁護主義者だった。」[33]

勿論トロツキーは，そうでない人々についても書いている。つまり，先進的な労働者の中では，［レーニン・テーゼにとって，］情勢は，より有利でった。ペテルブルグの諸工場には次のように書きつけられた。「もしロシアが勝ったからといって，我々に良いことはなく，我々はこれまで以上に抑圧されるだろ

30）『ソ連邦共産党史』第1冊，大月書店　1959年，271ページ。
31）アレクサンドル・ガヴリロヴィチ・シリャプニコフ，(1883—1937)，金属工，熱練旋盤工。1905年からボルシェヴィキ。1908年亡命。戦時中，スカンヂナヴィアで亡命組織と地下組織の連絡にあたる。
32）レフ・ボリソヴィチ・カーメネフ，(1883—1936)，本名　ローゼンフェリド。モスクワ大学放学。1903年ボルシェヴィキ，1908年以降亡命，開戦とともに，ボルシェヴィキ国会議員団の指導のためにロシアに派遣さる。
33）Leon Trotsky, *Stalin*. N. Y. and London 1941, p. 168, トロツキー『スターリン』Ⅰ，合同出版　1969年，277～278ページ。

う。」サモイロフはこう書いた。「イヴァノヴォ・ヴォズネセンクスの同志たちは，プロレタリアートの階級的本能をもって，なにが…正しい道であるかを感じ，戦争の最初の数ケ月に，すでに断固としてその道をすすんだ。個人として意見をはっきりさせることのできた者は，ごく少数であった。」[34]

ロシアでは，祖国防衛主義は，他国ほどには，深く根をおろしていなかった[35]。だから，社会民主党国会議員全体が，つまりメンシェヴィキもボルシェヴィキも，戦債に反対投票した。ただし，プレハーノフを指導者とするメンシェヴィキの間では，防衛主義的気分がかなり強かった。ボルシェヴィキでさえ，国際主義を放棄する者もでてきた。ボルシェヴィキ・パリ委員会の5人の委員のうち2人が対独戦争に志願している。また，後述する様に，ボルシェヴィキ国会議員団を指導していたカーメネフは，逮捕され裁判に掛けられた時，レーニンの敗北主義スローガンを否定した。

この様に，レーニンの戦術は，特に敗北主義の点で，ロシア国内でも運動の足並みを乱したことが分る。勿論，レーニンの戦術が誤っていたから乱した，というのではない。自国政府の軍事的敗北説は，実際はとにかく，理論の上では，誤りとは言えない。ここで，この帝国主義戦争で社会主義者のとった3つの立場を整理しておこう。第1は祖国防衛主義，第2は国際主義つまり反戦主義，第3は国際主義に立つ敗北主義・内乱戦術，である。レーニンは，勿論，第3の立場に立った。ポルシェヴィキは，ほぼ第2の立場にあった。そこへ新しくレーニンの敗北主義が提起されたため，少なからず混乱が起きたのである。

1914年11月露歴2～3日（西歴15～17日），ボルシェヴィキ国会議員（A. E. バダーエフ，M. K. ムラノフ，G. I. ペトロフスキー，F. N. サモイロフ，N. R. ジャゴフ）は，ペトログラード付近のオゼルキ村で会議を開き，ここには，ペトログラード，イヴァノヴォ＝ヴォズネセンスク，ハリコフ，リガのボルシェヴィキ組織，そしてロシア国内指導者カーメネフ，も参加した。会議では，レーニンの戦争についてのテーゼが審議された。そし

34）*Ibid.*, p. 168-169，同上，278ページ。
35）R. ダニエルズ『ロシア共産党党内闘争史』上，現代思潮社　1973年，23ページ

て，それは「完全に支持」[36]されたと，党史では書いてある。しかし後述するように，この方針に反対であったカーメネフが加わっていたので，そうきれい事で済んだはずがない。

11月4日，警察が出席者を全員逮捕し，その後，家宅捜査して，「戦争にかんするテーゼ」を押収した。1915年2月10日から13日（露歴）にかけて，議員5名と党員6名が裁判に掛けられた。ペトロフスキー，ムラノフは，レーニンの方針を守ると言明したのに対して，カーメネフは，戦争における自国政府の敗北のスローガンを否認した[37]。判決は，東シベリア終身流刑であった。社会民主党が反戦の立場を取り，あまつさえ，ロシア・ツァーリズムの敗北のスローガンを出したことによって，ロシアの党員たちは逮捕され，その数はうなぎのぼりになった。そして党組織は跡形もなく消えて行くのである。

このようなわけで，レーニン的反戦方針は，ロシア国内シルヴィキに，後年のソヴィエト史書が美しく描くようには，あまりよく貫徹しなかったのである。もし彼が，一歩先んずるような方針を出せば，ボルシェヴィキは従ったかもしれない。しかし彼は，いわば二歩先を行ったのである。レーニンが有能さでは並みの指導者で，しかも党内民主主義が行きわたっていたならば，レーニン的路線が貫徹したかどうか，あやしい。しかし，ボルシェヴィキ派は，殆んど彼より年令の若い革命家たちをレーニンが育成したものでもあり，レーニンは党内にあっても単なる党員ではなく，党を超える存在になっていたのである。ボルシェヴィキ党はレーニンの党であった。さて重要な問題は，ロシア国内のボルシェヴィキおよび亡命ボルシェヴィキはともに，大体，第2インターナショナルの左派・平和主義者と余り考えが違っていたわけではないことである。そのためにレーニンは，自分の戦術を党内に徹底化する必要があった。

36）『ソ連邦共産党史』同，277ページ

37）これにたいしてレーニンは，ローゼンフェリド［＝カーメネフ］の態度は「正しくない態度であり，革命的社会民主主義者の見地からは，ゆるしがたい態度である。」と非難した。（『全集』第21巻，1964年，163ページ）

2．「ヨーロッパ戦争における革命的社会民主主義者の任務」

「戦争にかんするテーゼ」は，極く短い序文をつけて，「ヨーロッパ戦争における革命的社会民主主義者の任務」（以下「任務」と略す）[38]という標題でジュネーヴでリーフレットとして印刷され，ベルン以外のボルシェヴィキ在外支部に送られた。

レーニンは，「戦争にかんするテーゼ」がベルン会議で審議されたので，印刷したのであろう。この時，「任務」では，「テーゼ」を基にしつつも，新しく加えられた所がある。つまり第(7)項の第3として，次のスローガンが現われた。排外主義と闘うこと，ロシア革命と民族解放の宣伝，民主共和制，地主の土地の没収，8時間労働日，がそれである。また文書の末尾に，「ロシア社会民主労働党員たる社会民主主義者グループ」と記されている。

レーニンは，個人的な性質の運動やイニシアチヴを避けることを慣わしとしていた。つまり，運動を民主主義的形式を取って進めるのを常としていた。彼個人の決定ではなく，党，委員会，グループなど，一定の集りにかけたものだけを実行に移すのである。彼は何時でもそういう意味での「合法性」を重んじた。だから，文書上の表現でもそうであった。ただし，内実はそうでもなかった。この時もそうであった。例えば，「任務」には，序がついているが，そこにはこうある。「最も信頼すべき筋からの報道によれば，…ロシア社会民主労働党の指導的活動家たちの会議が開かれた。」ここで最も信頼すべき筋というのは勿論レーニン本人である。指導的活動家といっても，正式の代議員ではなかった。会議も，ベルンに居た又はたまたま居合わせた，たかだか8名程度の党員の集りに過ぎない。この事は，流石にレーニンも自ら，「この会議は完全に正式なものとは言えなかった」と，認めている。だが，彼は強弁する。「しかし我々は，この会議がロシア社会民主党の最も有力な諸グループの見解を本当に表明したものであることを，十分正確に知っている。」これには無理がある。せいぜい，最も有力なグループの一つの見解，と言えるに過ぎない。実際

38）*Л.* том. 26, Москва 1969, стр. 1—7;『全集』第21巻，3—7ページ

はレーニン個人の見解である。この方針は，普通であれば，全党決議とは言えないものである。ところがこれが，あたかも全党決議であるかのように作用し出すのであった。

1914年9月27日（日曜日）に，イタリアとスイスの社会民主党の代表者の会議がルガノで行なわれた。その出席者は，イタリア側が，アルムチ，バラバノフ，デ・ファルコ，ラッツァリ，モディリアニ，モルガリ，ラッティ，ムサッティ，セラーティ，トゥラーティであり，スイス側が，アルビサー，フェーリ，グロイリヒ[39]，グリム[40]，ネーヌ[41]，プフリューガー，リマーセ，シェンケルであった。

レーニンの「テーゼ」あるいは「任務」は，スイスの社会民主主義者（たぶんグリム）を通じて，この会議にも伝えられた。会議はこのレーニンのテーゼの内の多くの命題をその決議に取り入れた[42]，と『レーニン全集』ではされている。しかし，この点は検討の余地がある。この会議の決議を作る為に議長グロイリヒは，グリムとネーヌによる編集局草案[43]を出した。これが討議され，決議となったわけである。この決議[44]は，国際主義的な反戦平和の立場に立っている。しかし，だからと言って，レーニンの戦術が取り入れられたと言えるかどうか，疑問を残すのである。確かに，ルガノ会議以前に，グリムはレーニンと話し合った。これによって，決議草案に影響が与えられたのであろうか？

レーニンの根本的な反戦戦術として，「自国政府の軍事的敗北」と「自国政府へ武器を向けよ」（後の，帝国主義戦争を内乱へ，のスローガン）を挙げるならば，これらの戦術はこの決議で採用されていない。そして，それ以外の，

---

39) Hermann Greulich (1842—1925),『ベルナー・ターグヴァハト』創始者の1人，国会議員。

40) Robert Grimm (1881—1959)，同。ツィンメルワルト・キエンタール両会議を提唱し，その議長。

41) Naine (1874—1926) 弁護士，スイス党幹部。

42)『全集』第21巻，163ページ

43) 現存していない。

44) Horst Lademacher, hrsg., *Die Zimmerwalder Bewegung*, Bd. 1, The Hague・Paris 1967, S. 22—24.

国際主義的反戦平和の主張は，表現の上で共通している。だが，これらの主張は，中立国であるイタリアとスイスの社会主義者で，特に左派であれば，当然持つものである。そして，外国の政党の一片のテーゼとその筆者の説得だけで，影響を受けるとは考えられない。その上，事実，根本的な点（＝レーニン独自の戦術）は取り入れられていないので，これらは，ボルシェヴィキ側の想い込み・岡惚れの類であろう。この問題について間接的な証拠があり，後年，ジノヴィエフは有名な演説で想起している。「第2インターナショナルが恥づべき崩壊をし，労働者階級を裏切ったと，我々が主張したので，スイスの同志グリムが我々の党の宣言を彼の新聞に掲載しようとしなかった。」[45]

3．「戦争とロシア社会民主党」

レーニンのこの頃の活動の一端を示しておこう。彼は，10月10日以前にベルンで戦争について報告した。10月10日に，ベルンでブンド派[46]のベ・コソフスキーの報告「戦争と社会民主党」についての討論で発言し，10月11日ローザンヌで，プレハーノフの報告「戦争に対する社会主義者の態度について」の会場で，彼に反対して発言し，10月14日ローザンヌで，15日はジュネーブで共に，「ヨーロッパ戦争と社会主義」というテーマで，報告した。16日にはベルンへ帰った。26日に，モントルー近郊のクラランで報告し，27日に，チューリヒで「戦争と社会民主党」というテーマで2時間にわたって報告した。これらの報告は，本項で扱う宣言つまり「戦争とロシア社会民主党」（注（48）を見よ）に書かれた見解を述べたものと思われるが，一例を挙げよう。レーニン自身が，チューリッヒでの報告の内容を後に書いている。「私は，自国の排外主義と愛国主義（敵国のそれだけでなく）にたいする仮借ない闘争を行なうことが各国社会主義者の義務であると確信しており，ツァーリズムをはげしく攻撃し，またそれと関連して，ウクライナの自由について述べたのである。」報告の十分

45）G. Sinowjew, *Die Weltrevolution und die* Ⅲ. *Kommunistische* Internationale. [o. 0] 1920, S. 13.

46）1897年創立のユダヤ人の社会民主党系組織「リトワニア・ポーランド・ロシア・ユダヤ人労者総同盟」

の九は，「第二インターナショナルの崩壊について，日和見主義について述べ，またドイツとオーストリアの社会民主党の立場に反対して述べた」[47]のである。彼は，活動費と生活費が苦しかったので，報告会では何がしかの入場料を取った。聴衆の入りが心配であったが，成功したようである。勿論，スイス亡命のボルシェヴィキの思想的統一を計ることが，最重要の任務であった。

ここで，ロシア社会民主主義運動の諸潮流について概観しておこう。戦争の勃発によって，ロシア社会民主党の中に，祖国防衛主義対国際主義の対立という図式が作られた。祖国防衛主義とは，英・仏・露の協商国側，つまりロシア側に立つものである。国際主義とは，どちらの側にも立たず，戦争を否定し，従って，第2インターナショナルの戦争協力に批判的な立場である。この中から，レーニンは唯一人，独特の立場に立った。ロシアの敗北と，内乱への転化という，情熱的革命的方針である。祖国防衛派には，プレハーノフを指導者とするメンシェヴィキの一部，およびボルシェヴィキの少数がなり，国際主義派には，マールトフに指導されるメンシェヴィキ，旧左派ボルシェヴィキであるフペリョード派，レーニン派ボルシェヴィキが入った。そして国際主義派には，2つの中心が出来る，つまりレーニン・グループと，新聞「ナーシェ・スローヴォ」を中心とする非レーニン派国際主義者たちであり，この新聞の編集人は，トロツキー，マールトフ，マヌイルスキー，アントノフ＝オフセイエンコ，であった。

レーニンは，10月11日以前に，「戦争とロシア社会民主党」[48]を書いた。この文書は，「テーゼ」あるいは「任務」をふえんした，論説体の作品である。カルピンスキーあて（10月11日以前）の手紙で，「テーゼはあまり読みやすくないので，その代りに同封の宣言を発行することにきめた」[49]と書き，同じ時期の別の手紙では，最大限に慎重に宣言を，テーゼでなく宣言を出版してくれたまえ，と依頼している[50]。ここで言う「宣言」は，「戦争とロシア社会民主

47）*W. I. Lenin. Briefe.* Band 4, Berlin 1967, S. 23—24. 原文ドイツ語；*Л.* **том. 49, стр.** 25,『全集』第21巻，29ページ。
48）*Л.* **том. 26, стр.** 13—23. ；同13～21ページ。
49）*Л.* **том. 49, стр.** 8；『全集』第35巻，1965年，156ページ。

党」である。しかし，10月17日には「単行の宣言の代りに，中央機関紙『ソツィアル-デモクラート』の次号を発行することにきめた」[51]と書いた。『ソツィアル-デモクラート』は，戦前1913年10月の第32号で終っていた。レーニンには掲載用の作品が幾つか集ったので，同紙を復利することにしたのである。宣言「戦争とロシア社会民主党」は，この第33号に，社説として入った。レーニンは書いている。「本号の社説は『テーゼ』の最終的な成文である。」[52]この号には，「ロシアの社会民主主義者からヴァンデルヴェルデあての回答」，ジノヴィエフ「流れに抗して」[53]，レーニン「社会主義インターナショナルの現状と任務」[54]が入って，11月14日，ジュネーヴで発行された。約500部であった。

「テーゼ」あるいは「任務」を読みやすく力強く豊富にした「宣言」は，前二者の方針・戦術をそのまま取り入れている。勿論，問題の敗北主義を採用しているし，また前二者にはなかった表現が1点新しく用いられた。つまり「帝国主義戦争を内乱に転化せよ」のスローガンである。

レーニンの手稿として「帝国主義戦争の内乱への転化というスローガンについて」という2パラグラフの書き付けがある。これは，どの作品のための準備か分らないが，結局，「宣言」に入れられた。だから「宣言」のための準備稿と見なすことができる。「宣言」にはこうある。「現在の帝国主義戦争を内乱に転化せよということは，コンミューン[55]の経験によって指示され，バーゼルの決議（1912年）がその輪郭をしめし，高度に発展したブルジョア諸国間の帝国主義戦争のすべての条件からでてくる，ただ一つの正しいプロレタリア的スローガンである。」[56]しかし，このスローガンは，第2インターナショナルのバー

50）*Л.* **том. 49, стр.** 10;『全集』36巻，327ページ。
51）*Л.* **том. 49, стр.** 11;『全集』35巻，160ページ。
52）*Л.* **том. 26, стр.** 39;『全集』第21巻，25ページ。
53）Gegen den Strom, in: Lenin・Sinowjew, *Gegen den Strom.* Hamburg 1921 .
54）*Л.* **том. 26, стр.** 36—42;『全集』第21巻，22～28ページ。
55）1871年のパリ・コミューンのこと，史上初のプロレタリア革命と言われ，3ケ月続いた。
56）*Л.* **том. 26, стр.** 362;『全集』第41巻，421ページ。

ゼル決議で，その通りに決められているのではない。内乱を起せとは書かれていない[57]。そこでレーニンは，巧みに「輪郭を示し」と言っている。

「宣言」の入った『ソツィアル-デモクラート』第33号は，国外のボルシェヴィキ支部とロシア国内にも，非合法で送られ，戦時中の党活動に極めて大きな役割を果たした。後には，帝国主義戦争に対する世界のコミュニストの信仰となるのであった。

「宣言」の執筆の時期に関わって，ここで奇妙な点が一つあるのに気付く。というのは，ロシア社会民主労働党中央委員会ロシア国内委員会がレーニンの戦争にかんするテーゼに賛成した，という通知をレーニンが受取ったのは，10月16日である。[58]しかし彼が「宣言」を書いたのは，10月11日以前[59]であった。

---

57) *Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung.* Band IV, *1898—1914*, Berlin 1967, S. 433—437.

「バーセルにおける国際社会党臨時大会の宣言」(1912年11月24—25日) ではつぎのように書いてある。先ずシュトゥットガルトとコペンハーゲンの大会で決定された反戦闘争の指導原則を再録している。

「戦争勃発の危機が切迫した場合，当該諸国における労働階級とその議会代表者との義務は，インターナショナル事務局の支持をうけながら，最有効と思われる手段の利用によって，戦争勃発の防止に全力をつくすことである。それらの手段は，当然，階級闘争の激化と一般政治情勢の激化とに応じて変化するものである。

それでもなお戦争が勃発したばあいには，そのすみやかな終結のために手をつくし，戦争のもたらした経済上ならびに政治上の危機を国民にゆりおこすために利用し，それによって資本主義的階級支配の排除を促進するよう極力つとめることが，その義務である。」(レーニン『帝国主義』付録，岩波文庫　1984年，209ページ)

バーセルの大会そのものでは，つぎのように要求している。「社会民主主義諸党にむかって，目的にかなうと思われるいっさいの手段をあげてその行動を継続すべきこと，…」(210—211ページ)

宣言の最後では，こうある。「そこで大会は，万国のプロレタリアおよび社会主義者諸君にむかって呼びかける。この決定的な時期に諸君の声をとどろかせよ！あらゆる形式で，またあらゆる場所で諸君の意志を公示し，議会で，堂々と諸君の抗議を申したて，大衆的な大示威運動に結集し，プロレタリアートの組織と力とがもつあらゆる手段を利用せよ！政府がプロレタリアートの油断のない，熱情的な平和意志にたえず注意するように配慮せよ！こうして，搾取と大衆的殺害の資本主義世界に，諸民族の平和と友好のプロレタリア的世界を対置せよ！」(同，216ページ，以上，訳文には傍点の付された部分があるが，ここでは省略)

58) 『全集』第21巻，519ページ。

59) *Л.* **том. 26, стр.** 13；同，21ページ。

「宣言」の末尾には，「ロシア社会民主労働党中央委員会」と署名されている。ここでレーニンは，「テーゼ」が承認される以前に，中央委員会の宣言を書いてしまっているのである。これは民主主義的手続きから言って，奇妙な事ではある。運よく採択されたから良いようなものの，採択されなかったら困りものである。しかし，何と言ってもレーニンという人物は，自己の信念を絶対正しいと思っていたし，ロシアの彼の部下たちがレーニンの意見と違ったとしても，彼らの見解に順応するような人ではない。むしろ説得して，彼らの考えを変えようとするはずである。また彼にはそれだけの権威と実力が備わっていた。

「宣言」と同じ号の『ソツィアル-デモクラート』（33号）に印刷されたレーニンの論説「社会主義インターナショナルの現状と任務」に，興味ある主張がある。彼は書いている。「現在の危機のもとで，もっとも苦痛なことは，ヨーロッパの社会主義の公認の代表の大多数にたいして，ブルジョア民族主義，排外主義が勝利したことである。」[60]

レーニンは，未完成の手稿「ヨーロッパ戦争と国際社会主義派」[61]を，かつてベルン会議が終ってから書いていた。その冒頭は，先の論説と類似した見解であり，またより一層彼の想いをはっきり記している。「社会主義者にとって最も苦痛なことは，戦争の災禍ではなく，…今日の社会主義の指導者の裏切りという災禍であり，今日のインターナショナルの崩壊という災禍である。」つまり彼は，戦争よりもインタナショナルの崩壊に，より苦痛を覚えていたのである。

むすび＝その後の論点

レーニンの「テーゼ」，「任務」，「宣言」は，第1次大戦における彼の革命戦術の基本をなしている。そしてまた彼の思想の発展過程をも示している。ここにおいて彼は，ロシア政府の軍事的敗北，および帝国主義戦争の内乱への転化，という二つの戦術にまとめあげた。この戦術は，レーニン主義者あるいは後の

60）**Там же, стр.** 36；同，22ページ。
61）**Там же, стр.** 8—11；同，8—11ページ。

共産主義者の指針となったものである。しかし，ロシア社会民主党では，この戦術は，勿論メンシェヴィキには支持されず，またレーニン率いるボルシェヴィキでは，除々にしかし完全にではなく支持されるようになった。

戦争中これらの諸方針は基本的には継続されたが，そのうちの二つの方針は変更されることになった。一つは，ヨーロッパ社会主義者の裏切りに対する批判が，急速に，中央派に対する批判へと重心が移されてゆくのである。第二は，「ヨーロッパ合衆国のスローガン」が，結局誤りであることが分り，捨て去られてゆくのである。

レーニンの独特の二つの戦術，つまり敗北主義と内乱戦術を，論じておこう。これらは，ロシアでは実際に，どの様にして実現し得たのか，あるいはそうではなかったのか。

1917年の二月革命（ロシア・ブルジョア革命）は，自然発生的事件であった。この時，二つの点でレーニン戦術が作用した。第一に，レーニンの反戦プロパガンダが，前線の兵士たちの一部に厭戦気分を生じさせた。第二に，二月革命の際，ボルシェヴィキの影響を受けていた者が，政治的に活動し，革命に参加した。この時ロシア国内では，ボルシェヴィキ党員は弾圧のために活動不能であった。二月革命は，レーニンの内乱戦術で引き起こされたものではなかった。内乱は，自然発生的であり，組織的に起きたのではない。また政府の軍事的敗北で起されたものでもなかった。ロシア政府は軍事的に敗北していなかった。

1917年10月のソヴィエト革命は，トロツキーとレーニンへのヘゲモニーによる内乱である。これは，「政府に武器を向け」た事件である。そして帝国主義戦争を内乱に転化させる戦術は，この革命で，ものの見事に実現したと言える。だがこれは，ロシア政府の軍事的敗北の結果ではなかった。

一方，レーニンの内乱戦術は，第一次大戦中，ヨーロッパの国際主義・平和主義の社会民主主義者によって殆んど支持されなかった。また，これはロシアで実現されただけで，第二次大戦にいたるまでは，短期間のハンガリーとバイエルンを除き，どこでも実現されなかった。そして西ヨーロッパではいまだにそうである。これは西欧のような政治体制の国々では困難な戦術であった。レー

ニンがこれを国際的戦術におし広げようとした時，彼は西ヨーロッパをロシアの社会と同じように見ていた。つまり西ヨーロッパ社会を部分的に誤認していた。